慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本語のかきまぜの獲得
Sub Title	
Author	磯部, 美和(Isobe, Miwa)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.54 (2002.) ,p.59- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成13年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000054-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

セッションを重ねるにつれて次第に低下していた。このことも強化の一時的飽和化効果では説明できず，おそらく強化間間隔の計時について何らかの再学習が起こった結果であると考えられるが，被験体が実際にどのような再学習を行ったかについてはさらなる研究が必要である。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科心理学専攻博士課程

引用文献

Nevin, J. A. (1971). Rates and patterns of responding with concurrent fixed-interval and variable-interval reinforcement. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 16, 241-247.

Staddon, J. E. R., & Innis, N. K. (1969). Reinforcement omission on fixed-interval schedules. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 12, 689-700.

日本語のかきまぜの獲得

磯　部　美　和*

1. 研究目的

子供は，母語を獲得する際に大人から得られる言語経験が質・量ともに不十分であるにもかかわらず，生後3～4年という短期間のうちに非常に抽象的で複雑な言語知識を獲得する。このように，子供の得る言語経験と最終産物である言語知識には質的な差が見られるのに，なぜ子供は言語を獲得することができるのだろうか。この問題に対し，生成文法における「原理とパラメータ」のアプローチでは，全ての言語が満たすべき「原理」と，可能な言語間差異の範囲を定めた「パラメータ」から成る「普遍文法」が人間に生得的に与えられていると仮定する (Chomsky 1981)。そして言語獲得の過程は，「パラメータ」が与えている選択肢を，生後子供が言語経験に照らして選択する過程であると考えられている。この立場に立つと，普遍文法にはどのようなパラメータが含まれているのか，という問いが生じるが，これまで行われてきた統語研究は，原理に関する興味深い提案に結びついたにも関わらず，パラメータに関する提案に乏しい。

この状況を踏まえ本研究では，子供の言語獲得の過程を主な研究対象として，パラメータの内容の検討を試みた。言語獲得の過程は，各パラメータの効果を独立に観察することができ，パラメータの性質を調べるのに最も有用な資料となっているからである。このように言語獲得の過程に着目することで，言語の多様性がパラメータによって制限されていると同時に，言語獲得過程もそれらのパラメータによって説明されるという仮説の妥当性を検討し，「原理とパラメータ」のアプローチによる言語研究が経験的に妥当なものであると示すことを研究目標とする。この目標に対し本研究は，具体的な統語現象として，移動操作である「かきまぜ」の諸問題を取り扱った。前年度までの研究では，日本語を母語とする子供において，「かきまぜ」が含まれる文が，それが含まれない文よりも獲得が遅れることを明らかにした。この研究を基に本研究では，日本語の「多重かきまぜ」と，それに関連する「多重主語構文」に関し実験を実施し，現在まで調べられていなかった獲得過程に関する資料の包括的な提出を試み，さらに理論的貢献としては，言語獲得過程を調べることがパラメータの所在を探るのに非常に重要であるという指摘を行うことを目指した。

2. 前年度までの研究と問題点

前年度までの研究では，二重目的語構文における「かきまぜ」の獲得過程を調査した。日本語のかきまぜの獲得過程に関してはOtsu (1994) があるが，主語と直接目的語の語順が入れ替えられただけの，単純な文の理解しか調べられていない。そこで，これまで報告されていなかった二重目的語構文におけるかきまぜの獲得過程を実験の実施により明らかにした。

日本語の語順は，英語などの言語と比べかなり自由である。例えば，(1a) のような二重目的語構文では，主語・間接目的語・直接目的語の語順を入れ換えることで (1a-f) のように6通りの語順が可能である。これは，日本語に「かきまぜ」という移動操作が存在するためであると考えられている (Hoji 1985, Saito 1985)。この分析によると，(1a) が日本語の基本語順であり，(1b-e) は (1a) からかきまぜを適用することで，名詞句を左側に移動させて生み出される。さらに，(1a) から (1b) を導く移

動の性質に関しては，(2a) から (2b) のような受身文を生成する際に含まれる移動（A 移動）と同じ種類であることが指摘されている (Nemoto 1993, Tada 1993)。

(1)	a.		太郎が		花子に　その本を	見せた。
	b.		太郎が	その本を	花子に	見せた。
	c.	花子に	太郎が	その本を		見せた。
	d.	その本を	太郎が		花子に	見せた。
	e.	花子に　その本を	太郎が			見せた。
	f.	その本を　花子に	太郎が			見せた。
(2)	a.	花子が太郎を押した。				
	b.	太郎が花子に	押された。			

Sugisaki (1997) や Otsu (2000) の日本語獲得研究によれば，(2b) のような A 移動を含む直接受身文は，移動を含まない間接受身文より獲得が遅れ，その遅れの原因は，A 移動にあると論じられている。この主張を基にすると，かきまぜの獲得に関しては，(1b) のような文は (1a) のような文よりも獲得が遅れると予測される。この予測の妥当性を調べるため，(1a), (1b), (1c) に相当する文を用いて，日本語を母語とする 3〜4 歳児に対して実験を行った[1]。結果は，(1a) と (1c) に関してはほとんど間違いが見られなかった一方で，(1b) に関しては正答率がそれらに比べ低かった。この結果は，(1b) のような A 移動を含む文が (1a) (1c) のような文よりも獲得が遅れることを示している。

このように前年度までの研究では，これまで指摘されていなかった A 移動の性質を持つかきまぜの獲得過程を解明し，日本語獲得の基礎研究として重要な資料を提示することができた。しかしながら，残された問題としては，日本語のすべての「かきまぜ」の獲得過程については解明されていない点が挙げられる。具体的には，(1a-c) の獲得過程については明らかになったが，(1e-f) のような，直接目的語と間接目的語の両方が文頭に移動する文の獲得過程に関しては調査されていない[2]。そこで本研究では，まず (1f) の獲得過程に関する調査を行った。

3. 研究内容—多重かきまぜと多重主語構文

本研究は，日本語における「多重かきまぜ」と「多重主語構文」の獲得過程に関して統語研究から導かれる予測を検証することで，現在まで調べられていなかった獲得過程に関する資料を初めて包括的に提出しようとする試みである。さらに理論的貢献としては，多重かきまぜと多重主語構文の知識が同時期に獲得されることを示すことで，言語の多様性に関する生得的な制約であるパラメータの存在に対する証拠を提示することを目標とする。

日本語には，欧米諸言語にはない興味深い統語的特徴が多数存在し，それらは言語理論研究の重要な研究課題となっている。その特徴の 1 つに「多重かきまぜ」がある。英語などの言語にも (1c) (1d) に相当する文 ("That book, Taro showed to Hanako.") は存在するが[3]，(1e) (1f) に対応する文 ("That book, to Hanako, Taro showed.") は非文法的である。このようにかきまぜの操作は 2 回以上適用することが可能である。さらに日本語に関して興味深い事実として，「多重主語構文」が可能であることが挙げられる。日本語では「文明国が男性が平均寿命が短い」のように，1 文中に主語が 2 つ以上現れることができるが，英語などの言語では不可能である。従って "civilized countries, male, the average lifespan is short." は非文法的である。

このように日本語では，多重かきまぜと多重主語構文の両方が可能であるのに対し，英語ではこのどちらも可能でないという事実を基に，Fukui (1986, 1999) や Kuroda (1988) は，この 2 つの統語現象を結びつけるようなパラメータの存在を提案した。この提案が正しければ，日本語と同種の多重かきまぜが可能な言語では，多重主語構文が可能であることが予測される。この予測の妥当性を調べるためにはどの言語が日本語と同種の多重かきまぜを持つかを知る必要があるが，大人の言語を対象とした理論研究では現在のところ，この点を明らかにできるほど数多くの言語を詳しく記述・分析するのが非常に難しい。従って，言語獲得の過程を調べることが非常に重要である。Fukui/Kuroda の提案は日本語獲得の過程において，多重かきまぜと多重主語構文がほぼ同時期に獲得されることを予測する。本研究では，この予測

を調べることで，多重かきまぜと多重主語構文を結びつけるようなパラメータが普遍文法に存在するという提案を検討した。

実験では日本語を獲得している子供3・4歳児16名を対象とし，上述のパラメータの妥当性を2種類のテストを用いて検討した。第1のテストでは，(1f)のような文を用いて，多重かきまぜの知識を解釈実験で調べた。具体的には，子供にノートパソコンで再生される短いアニメーションを見てもらい，最後に「いぬさんを うさぎさんに ねこさんがのせたよ」という多重かきまぜの構造を持つ文を与え，それがアニメーションの内容に一致しているかを判断させた。第2のテストでは，多重主語構文に関する知識を調べた。この実験では，(3)「おさるさんが足が長いと言ったのは誰かな」という文の構造的多義性を利用した。具体的には，第1のテスト同様短いアニメーションを子供に提示し，その後，(3)のような疑問文を提示し回答させた。(3)の文は，アニメーションの状況設定により「カバさんがおさるさんの足が長いと言った」という解釈と「おさるさんがキリンさんに足が長いと言った」という2つの解釈が可能である。前者の解釈は多重主語構造に由来するため，この構造をまだ獲得していない子供は後者の解釈しかできないことが予測される。

結果は，多重かきまぜのテスト(MST)に合格した子供のほとんどは多重主語構文テスト(MNT)でも合格し(16名中8名)，MSTに不合格だった子供はMNTでも不合格となっており(16名中6名)，2つのテストの結果には強い相関が見られた。これにより，日本語を獲得中の子供は多重かきまぜと多重主語構文をほぼ同時期に獲得していることが示され，Fukui/Kurodaの提案を支持することとなった。

4. 研究成果

本研究では，前年度までの研究で明らかにされていなかった「多重かきまぜ」の獲得過程の解明と，それに関連する統語現象である「多重主語構文」の獲得過程の解明を試みた。その結果，2つの統語現象が同時期に獲得されていることが明らかとなり，両者の可能性を司るパラメータの存在を支持することとなった。

多重かきまぜや多重主語構文は，日本語の重要な特徴として統語研究で盛んに議論されているが，それらの獲得過程に関してはこれまで実態が明らかになっていなかった。また従来の獲得研究は，欧米諸言語が中心であったため，それらの言語には存在していない多重主語構文は研究の対象になり得なかった。したがって本研究により，初めてその獲得に関する事実が明らかになり，日本語獲得研究の重要性が実証的に示された。この点は，統語研究に関しては日本語も欧米諸言語同様詳しく分析されているにもかかわらず，獲得研究に関しては日本語は遅れをとっており，調査すべき言語現象が数多く残されている現状から見て，非常に重要な貢献であると考えられる。

さらに本研究の成果として，子供の言語獲得過程の調査により，人間言語の多様性を制約するパラメータが生得的に存在するという仮説の妥当性の検討が可能であると指摘している点が挙げられる。限られた数の言語の特徴を比較することだけでは，いくつかの特徴の存在に相関関係が見られたとしても，それがパラメータに起因するものなのか，あるいは偶然そのような相関が認められるだけなのかを判断することが非常に難しい。一方，それらの特徴が同時期に獲得されることが分かれば，パラメータに対する強力な証拠となりうる。本研究では言語獲得過程を調べ，どのような知識が同時期に獲得されるかを検証することが，普遍文法にどのようなパラメータが存在するかを明らかにするために非常に有用な接近法であることを主張した。

参考文献

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.

Fukui, Naoki. 1986. A theory of category projection and its applications. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.

Fukui, Naoki. 1999. The Uniqueness Parameter. *GLOT International 4*, 26–27.

Hoji, Hajime. 1985. *Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.

Kuroda, S.-Y. 1988. Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. *Linguisticae Investigationes* 12, 1–47.

Nemoto, Naoko. 1993. *Chains and Case Positions: A Study from Scrambling in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.

Otsu, Yukio. 1994. Early acquisition of scrambling in Japanese. In *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, eds. Teun Hoekstra and Bonnie D. Schwartz. Amsterdam: John Benjamins.

Otsu, Yukio. 2000. A preliminary report on the independence of sentence grammar and pragmatic knowledge: The case of the Japanese passive. In Y. Nishiyama (ed.), *Keio Studies in Theoretical Linguistics* 2.

Saito, Mamoru. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*. Doctoral dissertation, MIT.

Sugisaki, Koji. 1997. Japanese passives in acquisition.

Paper presented at *Sophia Linguistic Society*. [Published in *UConn Working Papers in Linguistics 10* (1999)]

Sugisaki, Koji, and Miwa Isobe. 2001a. What can Child Japanese Tell Us about the Syntax of Scrambling? In *Proceedings of the 20th West Coast Conference on Formal Linguistics*, eds. K. Megerdoomian and L. A. Bar-el, 538-551. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.

Sugisaki, Koji, and Miwa Isobe. 2001b. Some Asymmetries in Child Japanese and Their Theoretical Implications. In *Proceedings of the Second Tokyo Conference on Psycholinguistics*, ed. Yukio Otsu, 187-208. Tokyo. Hituzi Syobo.

Tada, Hiroaki. 1993. *A/A' Partition in Derivation*. Doctoral dissertation, MIT.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程

注

1 統語研究において (1c) の移動は，(1b) の A 移動とは異なる性質を持った移動と考えられており，この知識に関しては Otsu (1994) が，獲得初期段階の子供にも理解されると報告している。

2 (1d) の移動の性質に関しては，現在数多くの分析が提案され，論議の対象となっているため，調査の対象外とした。

3 統語研究では，(1c) (1d) に相当する英語の文は「かきまぜ」ではなく「主題化」によって生成されていると考えられている。

社会的現実（リスク認知を含む）の構成過程に及ぼすマス・メディアの影響

大 坪 寛 子*

はじめに

近年，原子力問題を初めとしてリスクに関わる社会問題が多数発生している。こうした問題への対処をめぐって，盛んに論議が交わされているが，容易に合意形成に至ることは少ない。その原因として，リスク問題に関わる様々な立場の人々のリスクに対する認識が異なっていることが挙げられる。本研究の目的は，人々のリスクに対する認識が社会的に構成されているということを明らかにし，さらにリスクに対する認識にマス・メディアがどのように影響を及ぼしているのかを考察しようとするものである。

1. 社会的に構成されるリスク認知

リスクとは National Research Council (1989) によれば「被害の甚大さとその生起確率の積」であるが，ある事象に対する人々のリスクの見積り（「リスク認知」）は，所属する社会集団や地域社会によって異なる。

Slovic (1987) は，専門家と素人 (layperson) とではリスク認知が異なることを発見した。提示された危険性を伴う 30 の活動や技術について，認知するリスクの高さの順位が専門家と素人では異なり，たとえば大学生は「原子力」を 1 番目に挙げたのに対して専門家は 20 番目，「X 線」については専門家が 7 番目に挙げたのに対して大学生は 17 番目だった。日本人を調査対象とした水嶌・林 (1995) の研究でも，原子力関係の専門家と素人とでは，原子力発電や放射性廃棄物に対して専門家よりも素人の方がリスク認知が高いという結果を得ている。水嶌らは，リスク認知を構成する「未知性」と「恐ろしさ」の 2 因子のうち，「未知性」を構成する「知識」の捉え方が，一般の人々が「自分が直接知っている」ことを優先する傾向にあるのに対し，専門家は，「科学的にわかっている」ことを優先する傾向にあるということを発見した。この結果は，両者の違いは単に知識の差だけではなく，専門家が専門家特有のリスクに対する認知の様式を持っていることを示唆している。

しかし，専門家同士でも，所属する職業集団によってリスク認知は変わることが Mertz ら (1998) の研究で示されている。彼らは，化学物質に対するリスク認知を，化学製品を扱う企業の上級管理職，毒性学会会員，一般市民とで比較したが，全体的に化学製品の企業の上級管理職は毒性学会会員よりもリスク認知が低く，毒性学会会員のリスク認知は一般市民よりも低かった。また，毒性学会会員の中でも，政府や企業に所属している会員は，アカデミックな場に所属している会員よりもリスク認知が低かった。所属する職業集団によってリスク認知が異なるのは素人も同様で，小杉・土屋 (2000) は，専門